

## 【パート発表要旨】

日本仏教学会平成 22 年度学術大会  
2010 年 9 月 16 日(木)、大谷大学

発表者：高野山大学・文学部・教授 室寺義仁

発表題目：教説の宣言動機と最後の言葉 —仏説を意味付ける前提として—

二年間に亘る共同研究テーマ「経典とは何か」の許、2010 年度のサブテーマである「仏説の意味」を課題として研究発表を行うに当たり、まずは、「釈尊仏陀」に起こった二つの出来事に注目したい。と言うのも、本年度の学術大会から始まった共同研究テーマ設定の趣旨説明の一文には、「今回は、仏教研究の基礎であり根幹である『釈尊仏陀の教説』を伝える『経典』について、研究上の諸問題を討究するために、『経典とは何か』という共同研究テーマを設けることとした」とあり、そして、『仏説』あるいは『仏陀の言葉』(buddhavacana) とは、そもそもいったいいかなる意味においてかく言われるのであろうか。私たちはそれをどのように受けとめることができるのであろうか」と謳われている。この後者の視点を踏まえて見れば、「仏説」あるいは「仏陀の言葉」について、現代の我々にとって有益な効用を見出す様な仕方で、(新たに)「意味」付け、あるいは、価値付けんとする学的営為としての試みを行わんとする意思が、趣旨書から読み取れるように私には思われ、そうであれば、その学的試みに向かう前提として、

(1) 「釈尊仏陀」は、自ら覚知した法(ダルマ)を、いかなる心的動機から、世間の人々に、自らの教えとして説き始めたのか、この教説の宣言動機について確認し、

(2) その後、凡そ 45 年間に亘る、教え導きのための八万四千の「仏陀の言葉」の最後には、いかなる言葉が残されて、今に伝えられて来たのか、この最後の言葉を今一度再確認しておきたいと考えるものである。

なお、本発表者は、和語の「教説」をサンスクリットの 'śāsana' の訳語として用いる。その語義については、Vasubandhu (ca.400) 作の *Abhidharmakośabhāṣya*, VIII, 43b での用例を参照の上、シャーキャ・ムニの教えの伝承という意味で理解する。例えば、「したがって、そのように『過去・未来のものが、実在として有る』と主張する有部説は〔シャーキャ・ムニの〕教えの伝承上、宜しくない。そうではなくて、経典の中で『一切がある』と説かれている通りのまま主張すれば宜しい。そして、どのように経典中に『一切がある』と説かれているのかというと、『一切があるというのは、バラモンよ、ただ十二処があるという限りのことである』と」(cf. AKBh 301.5-8)と記されている様に。

具体的な検証対象資料として、(1) については、中村元が「法を説く慈悲」として捉えた、「そのとき尊師は梵天の懇請を知り、生きとし生けるものへの憐れみによって、さとした人の眼によって世の中を観察された」との伝承句などを取り上げる。(中村元選集(決定版)第 15 巻『原始仏教の思想 I』春秋社 1993 年、738-739 頁を参照。) (2) については、「あらゆるものごとは無常なものなのだ。(だから)怠ることなく努めなさい」との最後の言葉についての諸伝承を取り上げることとする。

こうした学術的な作業手続きを踏まえた上で、全球的な現代社会における仏教の流れが、例えば、上座仏教と大乘仏教に二分して捉えられとすれば(前田慧學「現代仏教と仏教研究の課題」『パーリ学仏教文化学』第 19 号 2005 年、pp.1-8 参照)、(1) の「(大)悲」としてのブッダの意思は、大乘経を拠り所とする大乘仏教に、見事に、引き継がれ、一方、(2) の「不放逸」の教えの伝承は、上座仏教の出家主義を貫く本流の流れの中で受け継がれている(であろう)ことから、伝統的な「三法印(四法印)」という要素に加えて、「大悲」と「不放逸」という教説内容要素を見出し得ることをもって、現代社会における「経典」の意味を討究する、その出発点にしては如何かと本発表者は考える。

(以上)